

1
なんだか分からないところ



TARO

この世界はいつでも冬に向かっている。

いくつかの明るい空の下で起きたことを思い出しながら、四つの季節のいちばん終わりへ向かって地球は回りつづけている。

そう思うと、少しばかり怖ろしくなっていて、僕は下手な歌を歌ってごまかす。

明るい空の下で起きたことを思い出しては、夢や希望に織り交ぜ、胸の奥にしまっていたものとひとつにして、声に出さずに歌っている。

あらかじめ冬へ向かうことが分かっているのに、皆、そのための準備をする必要がある。冬はとても厳しい寒さをこちらに仕向けてくるが、冬に向けて準備をすることは、むしろ心愉たのしいものであるといつかからかそう思うようになった。

おかしなことだが、皆、冬に向かっている小さく怖ろしさと引き換えに、そのための準備をする

いくつかの小さな愉しみを見つけ出した。

*

ついこのあいだの木曜日——。

ガケの上から黒いコウモリのような傘が降ってきた。ガケの上の大きな家の大きなベランダに干してあった傘が、こちらの方へ——僕のアパートがあるガケ下の町へ風にあおられてゆっくり舞い降りてきた。

ここには色々なものが降ってくる。飛ばされた帽子、男ものの上等な白いシャツ、宝くじのハズレ券、定期購読の英語の新聞——。

上の町のあれこれが風に飛ばされてゆらゆらと降ってくる。

ときには、人の声も。

「ふきだまり」と。

僕はしかし、そう思わない。ここはふきだまりではない。たぶん、きつと、おそらくは。

ガケの上にはときどき出かけていく。さして用

事もないけれど、急行の停とまらない私鉄電車の駅がある。駅の向こうには古めかしい給水場があり、ガケの上の町も下の町も、このあたりに暮らしている誰だれもが、その給水場から水道管をひいて水を飲んでゐる。

僕はしかし、アパートの近くにある外国の食品を多めに売っているスーパー・マーケットで青い蓋ふたのついた外国の水を買って飲むときがある。皆、同じ水を飲んでゐるが、そんなふうに、皆、少しずつ違う水も飲んでゐる。

ガケ下の町は都会のへりの窪くぼんだところにあつて、分かりやすく云いえば、「へこんだところ」ということになる。このへこんだところに生まれて、いまもここで暮らし、それがずっとつづくようにも思うし、いつか皆、ここから出て行ってしまふようにも思う。

父はガケの上のマヨネーズ工場で働いていた。いまはもう工場も、マヨネーズも、父も存在して

いない。

それは僕が予想していたより、ずっと早く訪れた。僕の予想はいつも当たらない。当たらないけれど、予想することはどうしてかやめられない。

生きていくことは予想することの連続でつづられている。たぶん、きつと、おそらくは。

今日は少し雨が降るかもしれない。寒くなるだろう。帽子を頭にのせて出かけた方がいい。でも、そのうち雲が晴れて陽が射し込み、歩いているうちに少し汗ばんでくるかもしれない。歩くと云っても大した距離ではない。ほとんどガケ下で一日を過ごすのだから、一日に歩く距離などたかが知れている。

他に用事がなければ、毎日、昼前に仕事場へ出かけていく。仕事場もガケ下にあり、そこで仕事をするので「仕事場」と呼んでいる。正確に云うと、僕の仕事場ではなく彼の仕事場だ。

彼というのはアルフレッドという名の外国人で、

国籍はアメリカだが、英語だけではなく、フランス語やドイツ語も話す。

彼はしかし、日本の言葉をうまく話せない。僕も彼に通じる外国の言葉をうまく話せない。

だから、僕と彼が正しい会話をしているのか、本当のところはよく分からない。

たとえば、僕はアルフレッドが何歳なのか知らない。ときどき彼は自分が僕よりもはるかに年長であることを主張してくる。

「イイですか？ 私はタローより、ちょうどフタマワリ、歳を食とっているんです」

本当にそのとおりなら、アルフレッドはいま五十四歳ということになる。「歳を食とっている」とそこだけはっきりした日本語で話すが、とてもそんなふうに見えない。

彼は僕が十代のころから、いまのアルフレッドだった。もじやもじやの頭で鼈甲べっこうぶちの眼鏡をかけ、瘦やせても太ってもいないちよūdい体型で、きれいに剃そったヒゲが夕方になると少し青々とし

てくる。いつも同じ黒い上着を羽織り、決まりきったメーカーの青いジーンズに黒いスニーカーを履いている。

出かけるときは、あまり似合っていないくたびれた帽子をかぶっていく。本を読んでいるときは、眼鏡の奥のやや緑色がかった灰色の瞳ひとみが心なしか澄んで見える。

僕の見るところ、アルフレッドはこの二十年間、まったく歳をとっていなかった。でも、自分がどれほど「歳を食った」のかと計算してみれば、たしかにそういう年齢になる。

この世界は着々と冬に向かいつつづけているが、皆もまた、ひとりひとり冬に向かっている。

けれども、いま自分が四つの季節のどのあたりまで来ているのかは分からない。

神様がそのようにこの世界をつくった。

じつに、うまく出来ていると思う。

ガケのことをこの町の人々は、ときどきかしこまって、〈鯨塚くじらづか〉と呼んでいる。地図に載ってい

る正式な名前ではない。皆が勝手にそう呼んでいるだけで、一応、由来はあるが、あまりに昔のことで、本当のところは誰にも分からない。それが、いつのことだったのか、それさえ正確には分からない。

〈バイカル〉の店主である椋本むくもとさんの話によると、ガケが「巨大な鯨」の形をしているからそう呼ばれているのだという。

「もう少し丁寧に云えば」と椋本さんは僕の他に誰も客のいない店内で声をひそめた。

「いまは暗渠あんきよになっているけど、昔、ガケ下の遊歩道は川だったでしょう？」

川だったことはむしろ記憶に新しく、ある年齢より上の住民は、当然、覚えているはずだ。

「あの川に、海から鯨が迷い込んできたことがあります。昼のニュースで全国放送されたので、大騒ぎになって——」

そのとき僕は五歳で、知らない大人たちが川に集まって、しきりに大きな声をあげていたのを覚

えている。

その事件をきっかけに、町の老人たちが先代の老人たちから聞いたことを思い出した。

「この川に鯨が迷い込んできたのはこれが初めてじゃない。大昔に巨大な鯨がさかのぼってきたという話を聞いたことがある——」

それはかれこれ二百年も前の話で、とんでもなく大きな鯨で、やはり体が川にはまって、そのまま絶命したという。

その巨大な亡骸なきがらを埋葬するためにつくられたのが〈鯨塚〉で、遊歩道に沿って——それはつまり川に沿ってということだが——ゆるやかに蛇行したようにガケがつづいているのは、「埋葬した鯨のかたちをそのままなぞっているからだ」と老人の一人がそう云ったらしい。

「つまり、ガケの上の町は鯨の背中の上につくられた町ということになります」

椋本さんはわざとらしく神妙な顔になって、僕にロシアン・コーヒーを差し出した。

いつものことだが、椋本さんの話は、どこまで本当か分からない。「町のいちばん北にあるから〈バイカル〉という店名にしたのです」と云うが、店は町の西側に位置している。看板商品のロシアン・コーヒーにしても、作り方を教えてもらったわけではないが、コーヒーにウォッカと卵黄とミルクを混ぜ入れたものと思われ、はたして、本場であるバイカル湖のほとりで、本当にこれと同じものが飲まれているのか大いに怪しい。

でも、僕はこのとき椋本さんから聞いた鯨の話を二年前に新聞に書いた。新聞と云っても、タブロイド・サイズの八ページほどのもので、一般的には、「タウン情報誌」と呼ばれているものに近い。そう云ってしまえば、なんとなく格好がつかような気もするが、この町の見るからに元気のない残念な様子を知っていたら、なぜ、こんな小さな町でタウン誌がつくられているのか理解に苦しむだろう。しかも、この新聞は四半世紀ものあいだ休みなくつづいているのだ。

このおかしな新聞をつくっているのが、ほかでもないアルフレッドで、彼はこの町にやって来てまだ間もない四半世紀前に自力でこのメディアを立ち上げた。

当然ながら、このタブロイド判に〈流星新聞〉と名づけたのも彼で、僕がまだ子供で、二丁目の駄菓子屋に通っていたころから、二ヶ月に一度のペースで刊行してきた。

彼はガケ下のさびれた空き家を格安で買い、自分の手で改装して、自分らしい自分のための居場所をつくった。それが彼の仕事場になり、つまりは、いまの僕の仕事場にもなっている。

どうして、ガケ下でつくられる新聞に〈流星新聞〉などという場違いな名前がつけられたのか、そこにはアルフレッドなりの考えがあった。

彼は椋本さんの話に出てきた二百年前の鯨の話
を「それはマユツバですね」と信じていない。

アルフレッドによれば、この町のへこんだ地形

は、「気がトオクなるくらい歴史的な大ムカシ」に大きな流れ星が落ちてきて出来たものだという。「イイですか？ ココは星が落ちてきたところなのです——」

ちようどアルフレッドが手のひらを広げたくらいの大きさのブリキでつくられた星のオブジェがあり、仕事場の正面入口にぽつりとひとつ飾られている。僕が子供のときからそこにそうしてあり、もとは青くペイントされていたが、いつからか錆が浮き出て、もはや何色とも云えない混濁した色に変わり果てていた。

四年ほど前から僕はこの錆びついた星を掲げた編集室に通っている。アルフレッドと二人でこつこつタブロイド新聞の記事を書いてきた。記事を書くための取材もこなし、この新聞にとって最も重要である広告の依頼をいただいてくる仕事も請け負ってきた。この小さな町の小さな飲食店や小さな洋服屋や小さな雑貨店を定期的に巡回し、「塵も積もれば」とつぶやきながら広告をとって

きた。

新聞は一部百円の値段が一応ついているが、実際にはフリー・ペーパーとして無料配布している。その結果、そうした店々からいただいた広告掲載料のあらかたが編集費にあてられ、わずかにのこった分がアルフレッドと僕のかな哀しいくらいささやかな収入になる。

仕事場はアルフレッドの住居を兼ねていて、彼は独身のままモカと一緒に暮らしてきた。

モカはアルフレッドが飼っている体が薄茶色で顔だけが真っ黒な小ぶりの雑種犬で、鼻に持病があつて、呼吸をするたび、スースーと鼻が鳴ってしまふ。モカは自分の顔の黒さを人に見られたくないのか、アルフレッドの腕の中に顔をうずめて見せようとしない。たぶん、アルフレッドの知り合いが外国から連れてきた犬ではないかと思うが、いっどこから連れてきたのか、アルフレッドに訊きいても、「どこからトモナク」としか答ええない。

錆びついた星を見ながら仕事場の中に入ると、床はコンクリートのままで、まだ星が青かったころから、外の歩道を歩いてきた靴のまま入ることが許されていた。

そこはアルフレッドの書齋にしてリビングでもある十畳ほどの部屋なのだが、子供のころはそこが何なのか分からなかった。喫茶店のようで図書室のようで、そのどちらでもなく、川沿いの歩道に向けて、「ドウゾ、ご自由に本をお読みください」と看板が出ていた。

ふたつの壁のいずれも端から端まで本棚になっていて、見たことのない外国の本が棚からはみ出して床にまで積み上げられていた。傷だらけの大きな木のテーブルがあり、そのまわりに、色もそれぞれな椅子いすがちぐはぐに並んでいた。

いまでも、ほとんどそのまま変わることなく、そういう意味では、いまでもこの部屋が何なのか分からない。「ご自由に本をお読みください」の看

板もそのまままで、いまも昔も、ときどきふらりと誰かが入ってきて、棚から本を選びとって、しばらくのあいだ本を読んでいく。町にぼつりぼつりとある商店の人たちが休憩がてら来ることもあるし、時間を持って余した老人が杖をついてやつて来たりする。わざわざ隣町から歩いてくる国籍不明の外国人もあり、一日の終わりに、そういえば今日は誰も来なかった、と気づくときもある。

ここを訪れる人に共通しているのは、彼らが皆、物静かであることだ。それは、おそらくアルフレッドが物静かであるからで、こうしたところに通って仕事をしていけば、僕もまた一日を静かに過ごすことになる。

アルフレッドは大きなテーブルとは別に自分専用の小さな机を部屋の隅に置き、モカを膝ひざの上に乗せたり足もとにはべらせたりして、本を読んだり原稿を書いたりしている。

僕はたいてい大きなテーブルの端の方で原稿を書き、ざらざらした紙のノートにボールペンで文字を書いていく音と、アルフレッドの腕の中に顔

をうずめたモカの呼吸音がスースーと部屋の中に響くのを聞いている。

*

「ねえ、こんなところでくすぶったまま人生を終わらせていいの？」

とミユキさんはそう云ったのだ。

本当は、これをこのままミユキさんの記事の見出しにしたかったが、アルフレッドに相談する前に自分で取り下げたのは、間違いなくミユキさんにしかられると思ったからだ。

もともと、ミユキさんは何をどう書いても満足しないと思う。昔からそういう人だった。

学年で云えば一年上で、面倒見がよくて後輩の誰からも慕われていた。なのに、どういいうわけか僕にはきびしかった。とりわけ、中学校に通っていたときのこと。ミユキさんは読書部の部長で、僕を副部長に任命しておきながら、「太郎君たろう、議事録はもつとききれいな字で書くように」「太郎君、

それでは本の読み方が浅いです」「太郎君、制服にアイロンをかけなさい」と、いつでも不満そうだった。

そのミユキさんがガケ下に帰ってきた。

ちようど、コウモリ傘が降ってきた木曜日のこと。傘をさして空から降りてくるのはメリー・ポピンズだったが、ミユキさんは中学生のころ、「メアリー・ポピンズ」のシリーズをことのほか愛読していた。映画でメリーを演じたジュリー・アンドリュースに憧れ、髪をまとめておかしな形の帽子をかぶり、黒いコートを着て、雨でもないのに黒い傘を小脇こわきに抱えていた。

傘が降ってきた木曜日に僕はいつもの時間に仕事場へ出かけ、アルフレッドは所用で出かけていたので、一人で大きなテーブルに向かって、書きかけの記事をまとめていた。

空が曇っていた。雲はあきらかに雨を孕みはら、いつでも雨を降らせる準備があると云わんばかりに

空を覆っていた。空が曇っていると眉をひそめる人がいるが、雲の向こうにはいつでも青空があつて、たまたま見えないだけなのだ。

仕事場の大きなテーブルから窓ごしに外を眺めると、すぐそこに遊歩道があつて、それはつまり鯨が迷い込んできた川を埋めてつくつたものだ。さほど大きな川ではなかった。もういちど云うが、僕はそのときまだ五歳で、川の中で息絶えた鯨を目撃したわけではない。でも、鯨がゆうゆう入り込んでくる川幅でなかったことは、遊歩道の道幅を見れば分かる。

アルフレッドの云うとおり、二百年前の巨大な鯨の伝説はともかくとして、二十五年前の昼のニュースで放映されたもう一頭の鯨は伝説ではなく確かな事実だった。こんな川に鯨があらわれるなんて、とそれまでまったく気にとめていなかった川の存在が、あるとき、一気にふくれ上がった。

いまでも、あの川は暗渠となつて遊歩道の下を流れている。青空が雲ですっかり覆われているよ

うに、川は表に見えないだけで、いまも地中深くを流れているのだ。

そのことを忘れないように、川岸の桜並木におがのこされた。

じきに、花を咲かせる季節がきて、川は見えなくなっても、桜は昔と変わらず満開におの匂いを香らせて、遊歩道に町の皆を集める。

仕事場の時計は午後一時だった。ストーブの前にはモカがいて、体を丸めて顔を隠しているので、寝息がくぐもって聞こえる。

誰かが立っていた——。

仕事場の入口に。黒いコートを着て錆びた星を見つめ、黒い傘を小脇に抱えて立っていた。

突然、あらわれたように見えた。

空からコウモリ傘が降ってきた午後に、その人も曇り空の中から傘をさして舞い降りてきたように、いつのまにかそこに立っていた。

こんにちは——とその人は云わなかった。何も

云わずにドアをあけ、曇り空から届く淡い光を背にして立っていた。シルエットになっていた。黙ってこちらを見て、僕もシルエットに目をこらしたが、僕が気づくよりも早く、

「太郎君？」

とミュキさんの声がした。

「ミュキさん？」とすぐに声を返す。何年ぶりだったろう。ミュキさんが町を離れてから何年が経ったのか。

「五年ぶり」とこちらの胸のうちを見透かしたようにミュキさんが云った。そういう人だ。いち早く見透かして、誰よりも早く事態を理解する。

部屋の中を見まわしながら入ってきたミュキさんは、かつてジュリー・アンドリュースを真似ていたときと同じメリー・ポピンズ・スタイルだった。おかしな形の少しつぶれてしまったような帽子もかぶっている。

あれからずっと、この格好を維持してきたようにも思えるし、たまたま、雨が降りそうな曇り空

だったので、傘を抱えているだけかもしれない。

ミユキさんと僕は、中学生のときも、高校生のときも、そのあとも何度か、このアルフレッドの「なんだか分らないところ」で顔を合わせていた。ひさしぶりに思い出したが、ミユキさんはこの場所をそんなふうに呼んでいた。

あらかじめ示し合わせたり、待ち合わせをしたりということはない。ここを訪れたくなったときにたまたま出くわし、その偶然が恥ずかしくなつて、いつでも、お互いを「あっ」と驚いたように指差した。その偶然が——ミユキさんの云うとおりであれば——五年ぶりに繰り返されている。

いや、まったく予期していなかったので、「あっ」と口にすることはなかったが、お互いの顔を認めたときの目が（あっ）と見開かれていた。

そのあとのセリフもたいい決まっている。

「本を読みにきたんですか」

学生のとときと同じ口調で訊いてみた。これに対

するミュキさんの答えも決まっています、

「一人になりたくて」

必ずそう云うと、その先は僕の存在などなかったかのように、一人で柵から本を引き抜いて一人で読んでいた。

でも、あれからそれなりの時間が流れ、雲の向こうの青空や遊歩道の下を流れる川のように目にすることは出来ないけれど、おそらく、それぞれの人生を彩る季節が変わったのだと思う。

「お願いしたいことがあって——」

ミュキさんはそう云って傘を抱えなおした。

「こんなわたしが料理をすることになるなんて」

ミュキさんは大きなテーブルの僕から少し離れたところに着き、独り言がつい口からこぼれてしまったようにそう云った。

「料理？」と確かめる僕の声に重ね、

「ロールキャベツ」

とミュキさんは大きくため息をついた。

「それしかつくれないし、それなら、何度か美味おい

しいって云ってもらったことがあって——」

「そうですか」とこちらはそう云うしかない。

「じつは、店を引き継ぐことになったんです」

ミユキさんはもう一度、部屋の中を見まわし、ストーブの前のモカに気づいて、僕の顔を不審そうに見なおした。たぶん、ミユキさんは留守だと知らずにアルフレッドに会いにきたのだろう。

「店って？」

「父親のあの店。知ってるでしょう？」

もちろん知っていた。

川が流れていたときの名残りで、遊歩道には橋の痕跡こんせきがのこされている。橋の名が刻まれた欄干の一部が健在で、ミユキさんの父親が営んでいた定食屋の〈あおい〉という名前は、すぐそばにのこされた〈あおい橋〉からとったものだろう。しかし、いまは暖簾のれんがしまいこまれたまま、じきに二年が経つ。

「疲れた。もうやりたくないって。わたしはつきり兄が引き継ぐものと思っていたんだけど、夢をかなえて競輪選手になって、挙句、勝手なこと

を云い出して、閉めておくのはもったいないから、ミユキが引き継ぐべきだって——」

新聞をつくっていれば、町のさまざまな事情を知ることになり、ミユキさんが話してくれたことも、〈オキナワ・ステーキ〉のゴー君から聞いて、およそのところは知っていた。むしろ、この五年のあいだにミユキさんがどこで何をしていたのか、町の事情通であるゴー君も知らなかった。

「美術館で働いているらしいって聞いたことがあるけど、〈バイカル〉の椋本さんが情報源なんで、まあ、本当かどうか」

ゴー君とは小学校から始まって、中学、高校と一緒にだった。合計十二年間も同じ学校に通ったことになる。だから、ゴー君もミユキさんのことはよく知っていたし、ゴー君は父親の飲食店を引き継いで、自分なりの新しい店を開いた経験もあった。

「とにかく、ロールキャベツしかつくれないし、そのひと品だけで、やっていけるものなのかつ

て」

ミュキさんは、そんな無謀なことを云い出した。

「それで、アルフレッドに相談しに来たんですか」

「違うの。出来たら、記事にしてほしくて——」

どうやら、ミュキさんは店を引き継ぐことはもう決めているようで、〈ロールキャベツの店・あおい〉と店名も決めて、あとは〈流星新聞〉で自分のことをとりあげてもらえないかと考えたらしい。

「先立つ物がないので広告は出せないけど、記事になったら、それが宣伝になるでしょう？」

「なるほど」

僕はようやくミュキさんに褒めてもらえると喜ぶが来たのではないかと口元がほころびそうになるのをこらえていた。

「記事は僕が書きます」

どうにか舌がもつれないようにそう云うと、

「なんで、太郎君が？」

ミュキさんは僕の顔をあらためて見なおしてい

た。さすがに事態の飲み込みが早いミュキさんでも、僕がアルフレッドと一緒に新聞をつくっていることは飲み込めていないようだった。

じつは、ミュキさんが町にいなかった五年のあいだに、僕もそれまでの仕事をやめて、いまはこういうことになっているんです——と説明すると、「ねえ、こんなところでくすぶったまま人生を終わらせていいの?」

ミュキさんは、そこでそう云ったのだ。

アルフレッドの説を思い出した。

「くすぶったまま」という言葉が、気が遠くなるくらい大昔に、この土地をへこませた流れ星の「くすぶり」を思い起こさせた。落ちてきた星は数百年にわたってくすぶりつづけ、石や岩や灰と化して、この土地の基盤をつくった。

そんな大胆な説を思いつくのは、アルフレッドがよそから来たひとだからだろう。この場合の「よそ」は、その言葉が本来持っている印象よりずっと深遠な役割を担っている。

アルフレッドはこのガケ下のへこんだ町を、この星の外から眺めるように俯瞰ふかんしていた。こんな小さな地味な町で新聞をつくらうと思ひ立ったのもそうだし、ひとつの星に別の星が落ちてくる確率の低さを尊いものと解釈して、

「だから私はココにイルのです」

と真顔でそう云ったことも忘れ難い。

それに引き換え、僕は何も知らないし、知ろうと思つたこともなかつた。

たとえば、遊歩道に並び立つ桜がどんなふう
に春の到来を予感するのか、僕は知らない。

人間と犬とがストーブの前からまだ離れられない冬の終わりに、桜は「たぶん、きっと、おそろく」と予感するのだろう。

仕事場の窓の外のすぐそこに桜の木は並んでいる。一ヶ月後には、窓に縁取られた景色のすべてに桜吹雪が舞い、うまくいけば、ミユキさんの「ロールキャベツの店」は新調した暖簾を掲げて

いるかもしれない。

僕の子想はいつも当たらないが、出先から帰ってきたアルフレッドがミユキさんの話をひととおりに聞き、

「キットうまくいきますよ」

と明言したのは、ありきたりな予想ではなく、

この世界を俯瞰する神様の声のようにも聞こえた。ただ、アルフレッドはそのとき、予想なのか神様の声なのか、もうひとつ聞き捨てならないことを窓の外を見ながらつぶやいた。

「私はザンネンながら、今年のサクラを見られないと思いますか——」

これまで一度も聞いたことのない低い声だった。

(つづく)